

オラドゥールの村の入口はサビ色の鉄板で出来ている。これを抜けると静寂に包まれた一面灰色の村である。事が起こったのはわずか74年前である。この時私も生を受けて4歳であった。決して遠い過去ではない。その惨劇の場を歩きながら村民たちの悲鳴や絶望的な叫び声、侵入者の放つ銃撃音を想像し、何とかそれらを聴き取ろうと努めたものの私の鈍い頭、鈍なところには何も応えなかった。

思えばこのオラドゥールからほんの30年前、第一次世界大戦においては“戦場にも人道を！”と唱えたA・デュナンの精神が生きていた。遠く離れた我が国でも“鳴門の第9”として記憶されているし（板東のドイツ人俘虜収容所）、それ以前の日露戦争では、マツヤマ！マツヤマ！と連呼しながら降伏してきたロシア人もいたという記録もある（松山のロシア人俘虜収容所）。にもかかわらず、先の大戦にあって、我が国の軍隊は近隣諸外国で数々の蛮行を重ね、その罪過を今も背負っている。わずか30年後のことである。墮落するのは早い。1945年8月、ヒロシマに原爆が落とされたと聞いた赤十字国際委員会のM・ジュノー氏はジュネーヴを發ちシベリア経由で満州の日ソ国境を越える時、捕虜の待遇に関する調査が目的であると伝えたところ、これに立ち会った日本軍将校はウス笑いをしながら、我が日本は捕虜に関する条約を批准していないヨ、とあざけったという。道義も礼儀も無くしている様子が見える。

蔭山 龍児【2018.10.1】